

## 岡山弁なまりの英語

岡田 和夫

「徳永さん」と近頃は気軽にお呼びするようになっていたが、私にとっては会社での雲の上の人であった。何しろ年が二回り近くも違うのだから。徳永さんはかの有名な東北大・金研から、記録によれば S9年（1934）4月7日、当時の湯浅蓄電池製造（株）に入社され S22年（1947）12月にはすでに同社取締役になっておられた。だから S27年入社私など普通ならとても話しかけてもらえる身ではなかった。ただ私の大学のその年の就職担当教授が東北大出身の方で、紹介して頂いたことを覚えている。しかしご本人はその頃から全く偉ぶらず、誰とでも気軽に話をされる人であった。

徳永さんが私にとって身近な存在となったのは S40年ころ私の所属する研究部の head になられた時であった。（S31年から常務取締役）

その頃我々の悩みの種は徳永研究部長がどこからか英文を持ち出して来られ、「君、これはどんな意味か？ちょっと訳してみて下さい」と聞かれること。私も USP や BP の特許明細書や専門の paper には馴れているつもりだったがさっぱり意味がつかめず、その上、「この word は文法的にはどういう事になるのじゃ？」と畳みかけられて弱り、「私は英語は中学で2年間しかやらなかったので…」と言って逃げ出すのが再々であった。

もう一つ、この頃から日本電池技術のレベルも向上し、欧米の技術者が我々の研究所や工場をよく訪れるようになったが、徳永常務

は傍にどんなうまい通訳がいても、ご自分で岡山弁なまりの英語で質問され、それが又よく通じること。これは私には今でも中々できないことであつたし、徳永さんの語らいの豊富さにも驚いたものである。

S45年1月、当時の湯浅電池（株）を retire された徳永さんは、続いて子会社の社長を2つばかりされたが、その後いつ頃だったか徳永さんから電話がかかり、「英語の翻訳の勉強をしているので岡田君もやってみませんか？」と誘われたのが、私がこの研究会の前身に入れてもらうきっかけとなった。今年、私は徳永さんがユアサを退かれた年齢を越えてしまった。これから何年も先まで、徳永さんが持っておられたようなコトバに対するファイトが持ち続けられるかどうか？悲しいことに自信がない。但し、本会では私はなお中年のようだから、まだまだ他にも目標とした方々は大勢いらっしゃるわけで、若い気持ちで皆さんの中に入れてもらって勉強を続けたいと思っている。